

新しい描画療法としての「楕円彩色法」の検討

—ある非行少年の事例を通して—

本間 なぎさ・森 和代

キーワード：描画療法 非行 楕円彩色法 自己表現

抄録：本研究では、筆者が着想した描画療法である「楕円彩色法」が心理面接においてどのように有効であったかを、非行少年の事例を検討することを通して明らかにすることを目的とした。対象者のA男は暴力行為をし、学校や警察署で嚴重注意を受けたにもかかわらず、その後も問題行動を繰り返していた。そのようなA男に対し、面接者である筆者は強い困惑や混乱といった逆転移を生じたが、そのことが契機となり、感情や思考を楕円図形への彩色により表現する「楕円彩色法」を着想するに至った。A男との面接に本技法を取り入れたところ、まず筆者がA男の問題行動やそこに付随するA男の感情や思考を理解できるようになり、そのことがA男自身も自分の問題行動や感情・思考について理解することにつながった。さらに、言語表現が苦手なA男が自分の問題行動のみならず感情や思考についても言語化できるようになり、内的な成長が促進され、問題行動の解消に至った。A男との面接に「楕円彩色法」を導入したことには、筆者の逆転移を和らげ、筆者とA男との関係を二者関係から問題行動についてともに眺め・語る関係すなわち「二等辺三角形の関係」に変化させ、A男の語る力を向上させるなどの効果があったと考えられる。また、本技法は「色を塗る」という簡単な方法で自己表現ができ、問題行動と直面化する際に伴う困難を軽減するなど、独自の特徴を持っていると考えられた。

1. 問題および本研究の目的

子どもを対象とした心理臨床では、対象者の言語能力が未熟であるなどの理由により、さまざまな遊びや箱庭、描画などの非言語的なかわりが多く用いられている。中でも、反社会的な問題行動を起こした子どもを対象としたいわゆる「非行臨床」においては、古くから積極的に非言語的なかわりが活用されてきた。非行臨床ではとりわけ描画法が用いられることが多い(藤掛, 2006)が、その要因としては、非行少年は一般的に口が重く、表現が幼く、言葉による自己表現が苦手という特徴があり、彼らの自己表現を補い助ける上で描画法が有効である(平川, 2000; 藤川, 2010など)ということがまず挙げられる。また、非行臨床を行う現場は主に家庭裁判所、少年鑑別所、少年院、保護観察所、警察の機関などの公的機関であり、予算や設備に限りがある現場も多い中で、特別な用具や設備を必要としない描画法は導入しやすいという要因もあるだろう。

筆者は警察の相談機関に勤務する相談専門員であり、反社会的な問題行動を起こした少年や

その保護者に対し、定期的な面接（継続補導）をすることにより問題行動の抑止を図っている。警察の相談機関における非行臨床は、法的権限により強制的に行われるのではなく、あくまで対象者の同意に基づく任意相談として行われるところに特徴がある。ここでも、他の現場と同様に少年のアセスメント、自己理解や内省の促進などを目的として描画法が多用されており、筆者も以前からバウムテスト、星と波テストなどの描画テストや、コラージュ療法、交互色彩分割法などの描画療法を少年との面接に取り入れてきた。

非行少年の多くは、自分の感情を抱えておくことや言語化することが困難であり、それを行動化する傾向を持つ。そのような少年たちとの面接では、心理療法で期待されるような内省が深まりにくく（河野，2003）、面接が展開せず現実場面での問題行動に歯止めがかからないということが起こりがちである。よって非行少年との面接では、彼らが自分の感情を理解し言語化する力をどのように育てていくかが一つの課題となる。

筆者は、非行少年との面接においてこの課題に取り組む中で、問題行動とそこに付随する感情や思考を視覚化し外在化する試みとして、**頭の中（脳）に見立てた楕円図形に彩色を施すことにより自分の感情や思考を表現する方法**を着想し、これを「楕円彩色法」と呼んで、独自の描画療法として非行少年との面接に取り入れてきた。本研究では、この方法を着想するきっかけとなった非行少年の事例を検討することを通し、面接に楕円彩色法を導入することによりどのような効果があったかを検討することを目的とする。

なお、本研究で事例を取り上げるにあたり、対象者とその保護者に対しては研究の趣旨や個人情報取り扱いについて口頭で説明した上で、同意書の提出を受けている。また、論文中の事例に関する記述については、個人情報保護のためその性質を損なわない範囲で修正を加えている。

2. 事例の概要

【対象者】A男（初回来談時中学3年生，14歳）

【主な問題行動】暴力行為，窃盗，喫煙，授業離脱，夜遊びなど

【家族構成】母，A男の2人暮らし

【生育歴】A男の出生後まもなく両親は離婚。生後5ヶ月から保育園に通っていた。小学校では、入学直後は行き渋りが激しく毎朝泣いていた。また、低学年の頃から勉強が苦手で授業中の落ち着きもなかった。中学年の頃から友だちにしつこくちょっかいを出す、暴言を吐く、物を壊す、授業を妨害するなどの行動が目立つようになった。高学年になると問題行動を繰り返すA男を周囲が敬遠するようになり、それに気づいたA男は周囲の目を過剰に気にするようになった。中学入学後、初めのうちは周囲の目を気にしてびくびくした様子が見られたが、中1の半ば頃、A男と同じように落ち着きがなく問題行動を起こす仲間数名と親しくなって行動を共にするようになり、以来びくびくした様子は見られなくなった。中1の後半頃からは、仲間とともに喫煙や夜遊び、授業エスケープ、暴力行為などの問題行動を日常的に繰り返すようになった。

【来談の経緯】中3に進級する直前の春休み、A男は後輩に暴力を振るい、学校や警察署で厳重注意を受けた。しかし、その後も万引きなどの問題行動が続いたことから、学校が母に筆者が勤務する相談機関を教示し、母子での来所相談に至った。

【臨床像】体格は中背で筋肉質。髪は短く、剃り込みのラインを入れたり、茶髪や金髪に染めるなどこだわりがある。表情は硬くごちない印象。時おり吃音が出ることもある。

【面接構造】週に1回、約1時間の面接を実施した。なお、筆者(以下、「Th.」と記す)は母親面接も担当し、2週間に1回A男の面接とは別の日時に母親面接を行ったが、本研究ではA男との面接過程のみを取り上げる。

3. 面接経過 (A男の発言は「 」, Th.の発言は〈〉, Th.の思いや考えは {} で表記する。)

【第1期】A男の問題行動が止まらず、Th.が困惑する(X年4月～5月：#1～#4)

X年4月、初めて来談したA男は神妙な様子で面接室に入り、自分がした問題行動について「タバコ、暴力、万引きなどいろいろやった。」と話した。後輩への暴行について今現在はどう考えているか聞くと、A男は「馬鹿なことをした。」「これから真面目にやらなければ。」と語るものの、実際にはその後も万引きをするなど問題行動は続いていた。A男とは週に1回の定期面接を行うこととしたが、面接開始後も同級生に暴力を振るう、髪を金に染める、授業離脱などを繰り返し、問題行動は収まる気配がなかった。特に同級生への暴行は、#3でTh.から話題に出すまですっかり忘れていたが、〈暴力あったよね。〉との問いを契機に思い出すと、一転してその同級生への不満を滔々と語り、反省や後悔は見られなかった。Th.が、〈ムカついたとはいえ暴力を振るっていいの？ それは犯罪行為だよ。〉と指摘すると、A男はハッとした表情を浮かべ、頭を抱えて「ヤバイ……。」とつぶやいた。Th.の指摘により、初めて事の重大性に気づいたものと思われた。

この時期は、面接で直近の問題行動について振り返ろうとしてもA男が忘れていたことがほとんどで、Th.が母親面接で把握した問題行動について話題に出すと、ようやく思い出して説明する状況であった。また、A男の話にはまとまりがなく、問題行動について聞いていると途中で相手への不満に話題が移ったり、話している途中で思い出した別の事柄に唐突に話題が移ることなどが頻繁にあった。それでもA男は、問題行動について最終的には「よくなかった。」「もう絶対しない。」と口にするが、しかし面接直後にまた次の問題行動を起こすといったことが繰り返された。そのような状況に、Th.は次第にA男の問題行動やA男の気持ち、考えていることについて {理解できない} {わけがわからない} との思いを強く持つようになった。

【第2期】楢岡彩色法を導入し、Th.のA男に対する理解が進む(X年6月～7月：#5～#11)

6月、A男は他校の中学生を殴ろうとして先輩に止められるということがあった。#5で理由を聞くと、「あいつらザコのくせに！俺にガンつけてきた！」と相手への怒りを口にし、自分の行動が問題だとは考えていない様子であった。面接の度に「真面目にやる。」と口にし、#3ではTh.の指摘に頭を抱えていたにもかかわらず、またもA男は些細な理由から暴力を振るお

うとした。この事態に、Th.はA男の気持ちや考えが理解できない思いが一層強くなり、「一体A男の頭の中はどうなっているんだろう。一度頭を割って中を見てみたいくらいだ。」という思いもわき起こった。そこでふと「頭の中がどうなっているのか、実際に表現してもらったかどうか。」と思い立ち、手元にあった紙に持っていた鉛筆で握りこぶし大の楕円形を描き、「これをA男の頭の中、脳だとする。ガンつけられたときの頭の中はどうだったか、色を塗って表してみて。」と促しながら楕円形の横に『ガンつけられた時』と記し、その紙と面接室にあった24色の色鉛筆をA男に差し出した。するとA男はしばらく考え込み、『赤』を手にとって楕円形を塗った。Th.が、「これはどういう状態？」と聞くと、A男は「カッとなっている。」と答えたため、Th.は余白に『赤』『カッとなっている』と記した。次に、Th.がその楕円形の下に矢印を描き、その下にもう一つの楕円形と『先輩に止められた時』と記して、「じゃあ、その後先輩に止められた時は？」と聞いた。A男はまた考え込み、今度は『群青』で楕円形を塗った。「これはどんな状態？」と聞くと、A男は「落ち着いている。暴力はいけないと思っている。」と答えたためそれもTh.がメモした。その後も同じ手順を繰り返し、一連の『行動』とその時の『頭の中』について、Th.は楕円形や文字を記入し、A男は彩色をするという作業を交互に繰り返して振り返った。するとTh.は、これまで全く理解できないと感じていたA男の感情や思考とそれらの変化が手に取るようにわかった気がした。また、A男はどの楕円形も必ず単色で塗りつぶし、「頭の中に複数の色が出ることはないの？」との問いかけにも、「ない。」と答えた。Th.は、A男が単色で塗った楕円形と、A男の『衝動的に問題行動を起こし、誰かに指摘されるまでそれがまずかったと気づかない』というパターンとを照らし合わせてみると、非常に納得がいくように思われた。「なるほど。こうやって色を塗ってもらったら、A男の気持ちがとてもよくわかったよ。」と伝えると、A男はこれまでに見せたことのないような、すっきりとしたいい表情を見せた。そのためTh.は、この方法はA男にとっても意味ある作業となったのではないかと感じた。その後、A男とTh.は完成した描画を見ながらもう一度事案を振り返り、カッとなって先輩に止められるまで『暴力はいけない』ということが頭の中から消えていたこと、何か問題を起こすときはいつも『他人の指摘により事後に気づく』というパターンであることなどを話し合った。

この面接以来、A男は暴力の問題を起こさなくなった。しかし、日常的には喫煙や遅刻、夜遊びなどの問題行動は続いており、それらについても楕円彩色法を用いて一つ一つの行動とそこに付随する感情や思考を確認しながら振り返った。その後、A男は夏休み前に仲間と無断で学校のプールに侵入する事案も起こしたが、そのことも楕円彩色法を用いて振り返った（#10）。その結果、仲間が鍵を壊している最中に「器物破損だからヤバイ。」と思っていたことがわかった。これまでのA男は、問題行動の最中に『問題だ』と気づくことはなかったため、他者からの指摘なしに問題に気づいたことは大きな変化であると思われた。Th.は、「そこに気づいたことはよかったと思う。途中でちゃんといけないことだとわかっていたんだね。」と伝えた。

このように、面接に楕円彩色法を導入して問題行動について振り返ることにより、Th.はようやくA男の問題行動の全容が理解できるようになった。また、完成した描画を二人で眺めな

が話し合うことで、Th.だけでなくA男自身も自分の行動や感情、思考について少しずつ理解するようになっていった。

【第3期】 A男が自分の問題行動について語れるようになる (X年7月～10月：#12～#18)

夏休み前半、A男は補習に行き宿題もやるなど意欲的に学習に取り組み始めた。面接では、「今までの自分はガキだった。犯罪は、人殺しや薬物以外は全部やったかも。」(#12)、「俺は知らない人がたくさんいる状況がダメだから、いつもクラス替えの後はしんどい。イライラして、春は問題ばっかり起こしてしまう。」、「仲間から、『A男は止まらない』と言われる。確かに、ケンカの際は相手がギブアップしても止まらなくて、みんなが止めても聞こえないし痛みも感じない。力づくで押さえ込まれてようやく止まる。」(#14)と語るなど、自発的に過去の問題行動を振り返り、その中で自分の弱さや課題への気づきを言葉にするようになった。ケンカについての発言を受け、Th.がこれまでの楕円彩色法を例に〈自分の力で頭の中を『赤』から『青』に変えられないんだね。〉と伝えると、「でもこの前、知らない人が足を踏んできて、ムカついてケンカしようとしたけど、後がないからしなかった。」と報告した。そこでそのことも楕円彩色法を用いて振り返ると、知らない大人に因縁をつけられて『黄色』(イライラした気持ち)になり、さらに足を踏まれて『赤』(すごく腹が立った)になったが、その後すぐに『水色』(問題を起こしたらヤバいと思っている)になり、最終的には相手を無視して通り過ぎたということがわかった。Th.は〈すごいね、自分で『赤』から『青』に変えられたってことだ。〉と伝え、A男の変化を確認した。

また、この頃になるとA男は高校進学も意識し始め、進学するためには喫煙や遅刻、授業離脱などの問題行動も改善していかなければならないと考えようになった。学校の三者面談ではそれらの問題行動についても話し合わせ、門限を8時とする、タバコをやめる、遅刻しないで登校するなどの約束事が決められ、毎日自分の生活を振り返って簡単な日記をつけることも課された。そのため、それ以降の面接では毎回A男の日記を見ながら1週間の出来事を振り返ったが、日記にはその日の出来事だけでなくその時の気持ちも書かれていた。さらに、「前の自分はどうしようもなかった。周りのことは何も考えず、本気で自分を中心に地球が回っていると思っていた。」(#17)と語るなど、A男の内省や自己理解は日記を書くことを通して一段と進んだように思われた。そんな折、校内で仲間を引きずられるようにしてA男も喫煙し、先生に見つかるといことがあった。その直後の#18ではいつになく緊張した表情で来所し、面接室に入るなり「約束事を破ってしまいました。」と喫煙の件を切り出した。A男は、喫煙のきっかけから帰宅後に泣きながら母親に報告したことまで時系列で報告するとともに、その時々自分がどんな気持ちでいたかも話した。Th.は相づちを打ちながらA男の報告を聞いたが、Th.からの問いかけや描画の手助けなしにそこまで語れるようになったA男に驚いた。Th.は、〈喫煙は残念。でも、そのことについてこんな風に自分の言葉で話せるようになったことはA男の成長だと思う。〉とA男に伝えた。

【第4期】A男が悩みや葛藤を言語化できるようになる（X年11月～X+1年3月：#19～#34）

11月初め、面接の時刻を過ぎてもA男が来所しないことがあった。定刻から1時間が経過した頃、ようやくA男が電話をしてきて、「今日、友だちから服をもらうことになり、そのことで頭がいっぱいになったら面接を忘れてしまった。今から行ってもいいですか。」と言った。Th.は、〈約束の時刻から1時間が過ぎており、今日はもう面接できないからキャンセルとする。面接を忘れないようにするためにはどうしたらよいか、次回までよく考えてみて。〉と話し、面接をしなかった。翌週の#19、A男は来所してすぐ「先週はすみませんでした。」と謝罪し、面接を忘れたことを振り返った。A男は、「前回、途中までは面接を覚えていたけど、友だちが服をくれると言ったら服のことで頭がいっぱいになり忘れてしまった。でもそういう自分はよくないと思い、今日は実は誕生日だけど、頭の中を80%は面接、20%は誕生日にした。友だちから『誕生日おめでとう』と言われる度に20%が50%になってしまったけど、でもそこで『今日は面接だ』と思い50%を20%に戻して、忘れないようにした。」と説明した。これまでのA男は楕円形を単色で彩色し、頭の中に複数の色が出てくることはないと言っていた。そのA男が、頭の中で2つの感情や思考を同時に保持し、その比率をコントロールしたと語ったことに、Th.は非常に驚くとともに、A男の内面が確実に成長してきたことを実感した。

この頃になると、A男は毎回〈この1週間はどうぞ過ごしていた?〉というTh.の問いかけに対し、約束を守れなかったことなど『よくなかったこと』を自ら話してくるようになった。そして、次第にA男は『問題行動を繰り返す自分』や『反省してもその気持ちを忘れる自分』に悩むようになった。さらに、約束事を守って生活し希望の高校に進学したい気持ちと、やる気を失い投げ出してしまいそうになる気持ちとの間で葛藤するようになり、面接ではその悩みや葛藤が語られることが多くなった。日常生活の報告では、「この前、親に頼まれて夜10時に買い物に行き、久しぶりに夜の外に出た。外の寒さを感じて、『こんな時間に遊んでたんだな』と思った。星がきれいで、夜遊びしていた時はこんなにきれいな星を見ないで、地面ばかり見ていたということにも気づいた。」(#22)など、些細な出来事もその時に感じたことや考えたことを交え情緒豊かに言葉で表現するようになった。面接での話し合いに楕円彩色法を用いる必要はなくなり、A男が日常生活の中で感じたことや思ったことを語り、Th.はそれを受け止めて感じたことを返すといった言葉のやりとりだけで面接が進むようになった。日常生活における問題行動は全く見られなくなり、喫煙や夜遊びもしなくなった。その後、A男は公立高校への進学を決め、中学校を無事に卒業したため、Th.との面接も終結となった。

4. 考察

楕円彩色法の有効性を考察する前に、ここで今一度、本技法の手順について確認しておきたい。まず、問題行動の概要を対象者に語ってもらい、その後に描画を行う。初めに、面接者が対象者の目の前で握りこぶし大の楕円形を描き、その傍らに「○○したとき」など事象や行動を言葉で記す。そして、対象者に「これをあなたの頭の中(脳)に見立て、この時の頭の中がどのようなであったか、色を塗って表してみてください。」などと促す。それを受けて対象者は楕円

形に色を塗る。その彩色を受け、面接者が「これはどういう状態ですか？」などその色が何を表すのか問う。対象者は楕円形を見ながら彩色による表現を言葉に置き換える。面接者は、対象者が置き換えた言葉を楕円形の横に記す。この繰り返しにより、問題行動の一連の流れやそこに付随する感情・思考を振り返るというのが本技法の手順である。使用する用具は、着想した当初はその時点で手元にあった再生紙と鉛筆、24色の色鉛筆を用いていた。その後は、パソコンにより描画した楕円形を印刷した用紙を用いたり、筆記具や画材を変えるなど試行錯誤を繰り返し、最終的には楕円形の枠どりや文字の記入には黒色サインペンを、彩色には24色程度のクレヨンを用いることとした(図1)。面接者が対象者の目の前で楕円形の枠を描きながら彩色を促すことや黒色サインペンを用いることは、風景構成法やスクイグル法の手法を参考にしたものである。彩色に使う画材は、より色彩が鮮明で彩色に巧拙が出にくく、サインペンによる描線と濃さが同程度に保てることなどからクレヨンを用いることとしている。

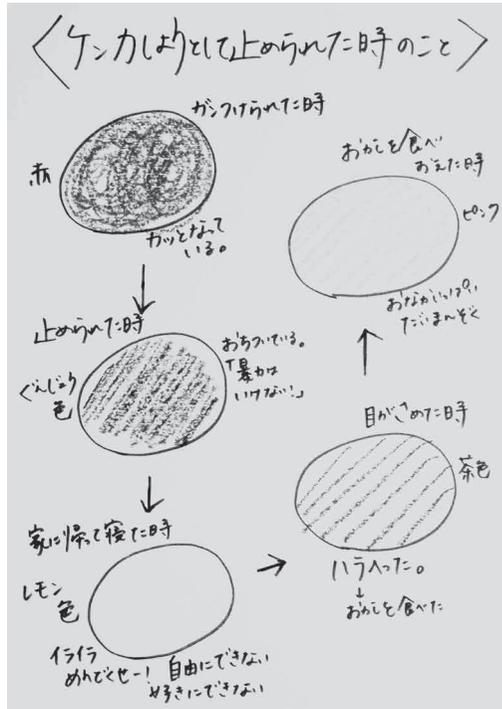


図1 楕円彩色法による描画(筆者による再現)

このような手順で実施されるのが楕円彩色法であるが、本技法がどのような効果をもたらしたのか、それにより面接場面やA男自身にどのような変化が生じたのかについて、Th.の逆転移、Th.とA男の関係性、A男の語りという3つの視点から以下に考察したい。加えて、他の描画法にはない本技法の独自性についても考察してみたい。

(1) Th. の逆転移の変化

第1期、A男は暴力行為をして学校や警察署で厳しく注意指導を受け、それをきっかけに筆者が勤務する警察の相談機関にも通うことになるという状況におかれているにもかかわらず、その後も問題行動を繰り返していた。加えて、面接に来てからもほんの数日前に起こしたことを忘れていたり、問題行動の振り返りの途中で唐突に別の話題を話し始めたりした。このようなA男の言動に触れ、Th.は次第に「理解できない」「わけがわからない」という思いを強く抱くようになった。河野(2003)は、非行少年の事例を理解する際に重要な視点として“面接者の逆転移”をあげ、“強い逆転移が面接の早い段階で起こるならば、彼らもまた、面接の初期の段階で何らかの投影性同一視を起こしていると考えられることができる”と述べている。この視点から考

えると、第1期のTh.には困惑や混乱という強い逆転移が生じていたといえる。そして、そのような逆転移を生じさせたのはA男の情緒的な混乱であり、A男はそれを自らの内に抱えられずTh.に投げ込んできたものと考えられる。また、A男にとって無意識のものであるこの情緒的な混乱は、次々と起こす問題行動やあちこちに飛び火するまとまりのない語りという形で行動化されていた。河野（2003）は投影性同一視について、対象者が自分の中の受け入れがたい感情を面接者の中に投げ込むとともに、面接者にその感情を実際に体験するように働きかけることであるとしている。A男の行動化は、まさにA男の情緒的な混乱をTh.にも体験させようとする働きかけであったといえ、その行動化に巻き込まれることでTh.の逆転移はより強くなった。それでもTh.は、なんとかA男を理解したいと話を聞き続けたが、A男は言語表現が苦手であり、特に「なぜこのようなことをしてしまったと思うか。」の問いかけには深く考えることなく「なんとなく。」「ムかついたから。」「わからない。」といったお決まりの返答を繰り返した。A男が情緒的な混乱を抱えていたからこそ、A男の稚拙な言葉では「わからない。」などという言葉にしかならなかったのだろうが、その答えにTh.はますます逆転移を強めるという悪循環になっていた。

この悪循環を打開する契機となったのが、楢岡彩色法の着想および導入であった。本技法を取り入れたことで、A男の話が途中で飛ぶことがなくなり、出来事や行動などの『現実的事象』と、感情や思考などの『内的な事象』の両方を、時系列に沿った一連の流れとして振り返ることができた。そこでTh.は初めて、A男の問題行動に対して「理解できた」との実感を得た。この実感を得たことで、Th.の困惑や混乱といった逆転移は和らぎ、A男の行動化に巻き込まれることもなくなった。藤川（2010）は、非行臨床において描画法を取り入れる意味の一つとして“作品という媒体をおくことによって、面接者との間に起こる転移がマイルドになること”をあげている。本事例においても、楢岡彩色法を導入したことでTh.の逆転移は和らぎ、A男の問題行動に対し「理解した」と感じるこころへとつながった。このことは、その後A男が自分の問題行動や自分の感情・思考について理解し、さらにより深い自己理解へとつながるような面接の展開を生じさせるきっかけとなったと考えられ、本技法は他の描画法と同様に転移がマイルドになるという効果があったといえるだろう。

(2) 二者関係から「二等辺三角形の関係」へ

楢岡彩色法は、Th.の強い逆転移が着想の契機であり、Th.にとって「わけがわからない」「理解できない」対象であったA男の感情や思考を理解するため、それを目に見える形で外に出してみようとする試みであった。このことは描画による「視覚化」「外在化」であり、結果として面接場面にTh.とA男の二者に加えてA男の問題行動や感情・思考を視覚化・外在化した「描画」という第三の存在が登場することとなった。これにより、Th.はA男に問いかけA男はそれに答えるという形で硬直していた関係が、Th.とA男が共に作り上げた描画と一緒に眺めて話し合うという関係に変化した。

神田橋（1990）は、心理療法や精神療法における治療者と患者との関係について、以下のよ

うに述べている。すなわち、対人関係の原型は二者関係であり、そこに三人目の人が登場すると三角の関係が作られるが、三角の関係ではいずれか一人を弾き出して本質としての二者関係に戻ろうとする圧力に満ちている。そして、三角の関係と本質としての二者関係の間には、その過渡的段階として「二等辺三角形の関係」が存在する。「二等辺三角形の関係」とは、二人が接近して弾き出された一人を「眺め・語る関係」であり、この二等辺三角形を作ることで目の相手との接近を強化したり確認することが可能となる。心理療法や精神療法では、治療者と患者が言葉により主訴などについて話し合うことを通して、二人でありながらも二者関係に陥らず、常にこの「二等辺三角形の関係」を保つことが必要であるとしている。

楕円彩色法を導入する前、第1期のTh.とA男の関係はまさしく二者関係であった。本来であれば、Th.とA男が言葉により問題行動について語ることで「二等辺三角形の関係」を形成する必要があったが、第1期ではTh.の強い逆転移やA男の言語表現の苦手さから二者関係に陥り、その状態で硬直していた。そのため面接は展開せず、現実場面ではA男の問題行動に歯止めがかからなかったものと思われる。しかし、第2期になり面接に楕円彩色法を導入し、A男の問題行動や感情・思考が視覚化し外在化されたことによって、逆転移にさらされたTh.と言語表現の苦手なA男にも容易に問題行動について「眺め・語る」ことが可能となり、「二等辺三角形の関係」を形成することができた。さらに第3期では、描画とともにより言語的な媒体である「日記」も二等辺三角形を形成するものとして登場し、最終的に第4期では、描画や日記などの媒体を介せず言語的なやりとりだけで自分の課題や悩み、葛藤について「眺め・語る」関係、すなわち「二等辺三角形の関係」を維持できるようになった。

第1期のA男は、情緒的な混乱を自分の内に抱えることができず行動化を繰り返していたが、面接で「二等辺三角形の関係」が形成されたことにより、A男の情緒的な混乱はまずその関係の中に抱えられるようになり、最終的にはA男が自らの内に抱えられるようになった。この経過の中でA男の内的な成長が促され、行動化が少しずつおさまり、現実場面での問題行動も解消されたと考えられる。本技法に限らず、面接者と対象者の間に描画など何らかの媒体を置くことは、「二等辺三角形の関係」を作りやすくする作用がある(川端・菅原, 2010)。しかし、楕円彩色法は問題行動そのものの経過やそこに付随する思考・感情を視覚化することができるため、それによって問題行動についてより具体的に面接者と対象者が「眺め・語る」ことが可能となる。この点が他の描画法との相違点であり、楕円彩色法が持つ特徴のひとつであると考えられる。

(3) A 男の「語り」の変化

森岡(1999)はナラティブ・アプローチの視点から、対象者の症状が消失するためには過去をともに探求し共同で再構成する聞き手の存在が必要であり、聞き手は対象者により断片的に語られた出来事の中にある“自覚にのぼらないストーリー”や“反復して使用される筋”を見いだすことが必要であると述べている。そして、そのように断片的な出来事をつなぎ合わせることは、抱え(holding)の役割を持ち、また衝動や感情の統制(affect regulation)に大きな効果

を持つとも主張している。この視点に立てば、非行臨床においては対象者と面接者が共同して過去の問題行動をひとつのストーリーとして再構成することが求められるといえる。その作業は、まず対象者である非行少年が問題行動について語り、その語りから面接者は非行少年の“自覚にのほらないストーリー”や“反復して使用される筋”を見いだし、断片的な語りをつなぎ合わせ、非行少年とともに過去の問題行動を新たな「物語」として再構成するというものとなるだろう。

この視点から本事例を振り返ると、来談当初のA男の語りは言語表現の稚拙さや話の「飛び火」が顕著であり、ひとつのまとまったストーリーとして聞きとることは困難であった。しかし、第2期において楕円彩色法を導入したところ、まず話の「飛び火」がなくなり、ひとつの問題行動を一連のものとして聞きとることが可能となった。また、「感情や思考を彩色により表す」という本技法は、事実の報告はそれなりにできるが、自分の内的な事象を言葉で表現するのが特に苦手なA男にとって、自己表現を補い助ける機能も果たした。森岡（1999）は、対象者の語りにおいて一般的な事実の報告が続くとき、「姿が見えるように」語ってもらう工夫が欠かせないと述べている。本来目で見ることのできない感情や思考を視覚化する方法である楕円彩色法は、この森岡の言う「工夫」に当たるといえる。この工夫は、A男の語りや、Th.がA男の問題行動をひとつのストーリーとして理解することを補い助けるものであったと考えられる。

また、本技法はTh.とA男が交互に楕円形や文字をかき、色を塗ることで一つの描画を完成させるが、これはまさにTh.とA男の共同作業であり、“過去をともに探求し共同で再構成する”プロセスだといえるだろう。そのプロセスの中でTh.は、例えばA男の暴力についてであれば、「カットとなると『暴力はいけない』ということが頭の中から消えてしまう」ことや、「誰かに言われるまで『暴力はいけない』ということに気づかない」ことなど、A男の“自覚にのほらないストーリー”に気づき、さらにA男の問題行動がいつも「他人の指摘により事後に気づく」パターンであるという“反復して使用される筋”を見いだすことができた。それをA男と共有することにより、A男の暴力行為は新たな「物語」として再構成され、A男にとってひとつの経験として内面化されたと思われる。実際に、その後A男の暴力による問題行動は消失しており、A男の暴力はA男の内に抱えられたと考えてよいだろう。さらに、楕円彩色法を用いた振り返りを繰り返すうち、次第にA男の語る力が育まれていき、第3期の最後にはA男が自らの力で問題行動について言葉で語るまでになった。ゆえに、楕円彩色法には語りを助ける機能とともに、語る力を育む機能もあったと考えられる。具体的には、Th.が楕円形の傍らに「事象や行動を表す言葉」やA男が自ら塗った色から置き換えた「感情や思考を表す言葉」を文字にして記すことにより視覚化したことや、出来上がった描画を見ながら話し合うといった行為が、A男の語る力を育んだのではないかと考えられる。

(4) この描画法の独自性

ここまで、楕円彩色法の有効性を、Th.の逆転移、Th.とA男の関係性、A男の語りという3

つの観点から考察した。この本技法には、これらに変化をもたらすという効果の他に、独自の特徴がいくつかあると考えられる。

まず一つは、対象者が「色を塗る」という作業により自己表現をすることである。色を塗るという行為は幼児期における塗り絵遊びに象徴されるように、誰にとってもなじみがあり、簡単で、特別な技術がなくとも自分なりの表現がしやすい方法である。前述の通り非行臨床では描画法が用いられることが多いが、一方で絵を描くことの苦手さから描画に抵抗を示す少年が多いのもまた事実である。特に、筆者が所属する警察の相談機関は、非行少年とのかかわりに際し法的な強制力はなく、あくまで任意相談で非行少年とかかわるといふ特色がある。そのため、対象者に面接そのものやその中で行われる描画法などの取り組みに対する抵抗が生じたときに、それがストレートに表出されやすく、かかわりを困難にしがちである。そのような現場においても、小さな楕円形に色を塗るという方法であれば単純かつ簡単で、さらに巧拙が出にくいいため抵抗が軽減され、導入しやすい。また、単に色を塗るだけであっても、塗り方や色の選び方、組み合わせ方を工夫することにより表現の幅はかなり広がるため、その表現から対象者の内的世界を読み取ることも可能であると考えられる。

そしてもう一つは、問題行動との直面化に伴う苦痛や困難を軽減するということである。藤掛(2006)は、非行の背景には非行少年の“極端な背伸びの生き方”があり、彼らが背伸びを止めて自分の弱さを認めることは無力で寂しい自分を直視することで、それは彼らにとって怖ろしく辛い作業であると述べている。非行少年にとって自身の問題行動と直面することは自分の弱さや課題と向き合うことであり、そこには相当な苦痛や困難が伴うが、その作業なくして非行から立ち直ることはできない。こうした観点から考えると、本技法は問題行動そのものを取りあげて振り返り話し合う、すなわち問題行動と直面化する方法だといえるが、そこに「色を塗る」という作業や「色を塗ったものを眺める」といった作業が媒介されるため、言葉で直接語るより負担が少なく、苦痛や困難を軽減しながら問題行動と直面化することが可能であると考えられる。

当然のことながら、楕円彩色法が上記のような特徴を持っていても、その導入に際しては他の描画法と同様に、面接者と対象者との間に十分な信頼関係が築かれていることは前提となるだろう。

5. 今後の課題

本研究では、筆者がA男との出会いから着想した楕円彩色法の有効性について、事例を検討することを通して考察した。楕円彩色法にはTh.の逆転移を和らげ、Th.とA男の関係性を変化させ、A男の語る力を育むなどの効果があったと述べてきたが、これらの効果には楕円彩色法を導入したことだけでなく、面接場面でのさまざまなやりとりを通してA男とTh.の関係性が深まったことなども作用していると思われる。しかし、楕円彩色法という描画療法を用いたからこそ、関係性の深まりも促進され、考察で述べたような効果がより顕著に表れたとも考えられるだろう。

楕円彩色法は、「色を塗る」という単純で簡単な方法により言語化することが困難な感情や思考を表現することが可能であることから、問題行動の振り返りを必要とする非行臨床だけでなく、その他の臨床現場や教育、福祉などの領域でも介入法として、またアセスメントやコミュニケーションの手段として、さまざまな活用が可能ではないかと考えられる。実際、筆者は勤務する相談機関において犯罪被害にあった子どもに対するカウンセリングも行っているが、言葉で語ることが困難な被害事実やその時の心情を面接で扱う際に、本技法を活用した事例もある。楕円彩色法がさまざまな領域で活用することが可能となるように、さらに実践事例を積み重ねるとともに、基礎的研究等を行っていくことによりその有効性を実証的に明らかにしていくことが今後の課題であろう。また、本研究では楕円彩色法によって描かれた描画の色や塗り方など内容に関する分析や、用いられる用具についての検討および考察は行わなかった。これらについての研究をすすめていくことも、今後の課題としたい。

付記

本研究をまとめるにあたり、事例を取り上げることについて快く承諾してくださったA男さんとそのお母さんに心より感謝いたします。ありがとうございました。

文献

- 藤掛明 (2006). 非行少年に対する描画療法 現代のエスプリ 462, 189-197.
- 藤川洋子 (2010). なぜ芸術療法か～非行少年と風景構成法～ 日本芸術療法学会誌 41, 1, 40-47.
- 平川義親 (2000). 非行少年の理解と援助の手がかり 現代のエスプリ 390, 81-90.
- 神田橋條治 (1990). 精神療法面接のコツ 岩崎学術出版 227-255.
- 川端壮康・菅原正和 (2010). 治療者に怒りを向けてくる非行少年との面接過程—三角形の構図を維持するための工夫について— 尚綱学院大学紀要 59, 1-10.
- 河野莊子 (2003). 非行の語りと心理療法 ナカニシヤ出版 39-50.
- 森岡正芳 (1999). 精神分析と物語 (ナラティブ) 小森康永他 ナラティブ・セラピーの世界 日本評論社 75-92.